

2022年2月6日(日)

老球の細道654号

目指せ！オールラウンダー、ゼネラリスト

会津バスケットボール協会 室井 富仁

新聞で畑違いの経済欄に目を通すと時として面白い記事に出会うことがある。朝日新聞の『経済気象台』というコラムである。大谷翔平選手が大リーグの年間最優秀選手に選ばれたことについて書かれていた。そこでは盗塁の部門についても評価され、野球の「走攻守」という観点からむしろ三刀流であるという。大谷選手の幅広い能力から、一つのことに秀でたスペシャリストよりも色々なことに高い能力を示すゼネラリストの重要性について述べられていた。下記はその記事の一部抜粋である。

【危険かつ疲労もたまるのに、なぜ彼は走攻守すべてにこだわり続けたのか。恐らくそれは、楽しいからなのだ。走攻守の各魅力を存分に味わって完全燃焼したかったのだろう。その意味では彼は三刀流というよりも、フル規格のゼネラリストとみなすべきだ。勝利数も防御率も、またホームラン打率も、1位だったわけではない。今回の受賞は、トップの成績を何らかの部門で残したスペシャリストよりも、幅広い分野で高い能力を示したゼネラリストが評価された瞬間ともいえる】

時折しも、バスケットボール界も「オールラウンドプレイヤー」がトレンドである。特に大きな選手が走れ、ドリブル、アシストパスが上手く、そして3Pシュートが入ると何でもできることが当たり前になっている。八村塁選手、渡邊雄太選手等がNBAで何とかやっていけるのもオールラウンドプレイヤーの能力を兼ね備えているからに他ならない。

『月刊バスケットボール2022年3月号』に島本和彦氏が渡邊雄太選手の子どもの頃のエピソードを紹介している。渡邊選手は小学生の頃、島本氏と岡山恭崇氏のバスケットボールクリニック『ファイブスターキャンプ』に参加したことがあるという。その時の渡邊選手の印象について島本氏は「あまり印象にない。すごくおとなしくて、普通の小学生と変わらぬ身長でしたし、失礼な話ですがそんなに上手でもなかった」と書いている。

また、そのクリニックで岡山氏の渡邊選手に対するアドバイスは今でも覚えているという。「君はそんなに大きくないのだから、ドリブルワークやパスを一生懸命することが大切だ。コートに入るとほとんどの子たちがすぐにリングに向かってシュートを始める。でも、そのときにドリブルの練習をするんだ。必ずやそれが生きる日が来るよ」

それから5年後、渡邊選手は尽誠学園2年生でウインターカップ決勝に進出。身長は190cm台になっていた。島本氏が東京体育館へ見に行くと、渡邊選手はメインコートに入って来るやいなやコートの隅でドリブルワークを始めていた。それを見た島本氏はびっくりするとともに、思わずウルっときたそうである。

時代が変わり、トップアスリートになってからもオールラウンダー、ゼネラリストが求められる時代になってきた。今まで以上にミニ、ジュニア時代は多様な運動経験、正しいファンダメンタルスキル、心身のバランスなどが必要になってくる。コーチの真価が問われる。